

第3章 林竹二の学問観と1970年代宮教大の教員養成改革

遠藤 孝夫

はじめに

「近代は、前近代の発展として、出現した。これはいうまでもないことだが、そうだとすれば、前近代の世界で達成されたものの堅固な基礎を欠いた近代は、根なしぐさということになる。前近代は、何らかの形で、近代の中に『生き』(残存ではない)、それを支え根底をなしていなければならない。これは歴史の逆説などというものではない。これがまさしく歴史の論理なのである。」

(林竹二「抵抗の根 一田中正造研究への序章」『思想の科学』1962年9月号)

近年、教員の資質向上が叫ばれ、各地の大学では競うように教員養成教育改革の多彩な試みがなされている。このことの重要性は論を待たないが、同時に一種のブームのような教員養成改革の状況の中で、それら新たな試みが「根なしぐさ」にならないための学的な営為もまた必要となるだろう。そして、そのための一つは、これまでの教員養成教育の歩みの森の中に分け入り、そこから今後の教員養成教育改革にとっての「堅固な基礎」となり得る豊かな経験や知見を掘り起こす作業であると考ええる。本報告では、この観点から宮城教育大学(以下、宮教大と略記)を取り上げることとする¹⁾。

1970年代前半期の宮教大の大学改革とその当時の学長を務めた林竹二(学長在任は1969年から75年まで)の言動については、新聞紙等でも取り上げられ、また関係した当事者の回想的な文章や概説的な書物も少なからず刊行され、林竹二の「授業巡礼」に関する研究的な論説も散見される状況にもある²⁾。しかし、回想や論評の段階からより踏み込んで、宮教大の大学改革(教員養成教育改革)の内実とその意味とを、学的に検証する作業は未開拓の状態と言わざるを得ない。とりわけ、①そもそも宮教大の大学改革を貫徹していた理念・基本原理は何であったのか、②その新たな教員養成教育によって如何なる資質・能力を持つ教員が養成されたのか、③それらの教員がその後、如何なる教育実践を行っていったのか、さらに④1970年代のこの改革がその後どの様に継承されたのか。こうした未だ十分に解明されていない論点の学的な検証作業は、今後の我が国の教員養成教育改革にとっての「堅固な基礎」の獲得の点から極めて重要な意味を持つものと考えられる。今年(2019年)は林竹二の没後20年にあたり、また宮教大の改革からは約30年が経過し、改革を直接担った当事者たちが相次いで大学を退官し、またその当時大学生活を送った教員もやがて

退職の時期を迎えようとしている。資料調査や聞き取り調査等も考慮すれば、宮教大の大学改革を本格的な検証の俎上に載せるべき時期にきていると考えられる。

ところで、林学長の下で大学改革の第一線を担った横須賀薫は、「これらのこと（引用者注一宮教大の大学改革）は学長が林でなければ実現しなかったものであるだろう」3）と述べ、同じく岩浅農也は「林竹二においては学問と生きざまが一本にまとまっている」4）、と回想している。これらの証言は、宮教大の改革が林竹二の強いリーダーシップの存在抜きには有り得なかったこと、しかもその林竹二による大学改革は、彼の「生きざま」とも化していた独自の学問観を根底に有するものであったことを強く示唆している。それでは、いったい林竹二は如何なる学問観を持ち、その学問観は宮教大の教員養成教育改革とどの様に関連していたのだろうか。

本報告は、以上のような課題意識と宮教大の大学改革に関する総合的な検証という研究構想に基づきつつ、まずその一歩として、林竹二の学問観の分析を通して、宮教大の教員養成教育改革を貫徹したと考えられる理念・基本原理に迫ることを課題とするものである。以下、まず林竹二の生涯を学問研究を中心に概観しくⅠ>、次いで林竹二の学問観を分析しくⅡ>、最後に林竹二の学問観の関連から宮教大の教員養成教育改革の理念・基本原理を明らかにするくⅢ>、という手順で課題に迫っていきたい。

1. 林竹二の生涯

まず、本報告の前提的理解のために、林竹二（1906～85年）の生涯を便宜的に4つの時期に分けて、その学問研究を中心として概観しておきたい5）。

（1）終戦まで（1906～45年）

林竹二は、1906年（明治39）、栃木県の視学を勤めていた矢板大安の次男として生まれ、父親の転勤の関係で小学校5年生からは山形県内の小学校と中学校で学んだ。新庄中学校在学中に英語教師角田桂嶽の影響から洗礼を受け（バプテスト派）、さらに東北学院専門部師範科へと進学した。当時の東北学院の英語教師には、ダンテ『神曲』（岩波文庫）の翻訳で著名な山川丙三郎（後に林が最後まで研究し続けた人物の一人である新井奥邃の弟子）がいて、林は大きな影響を受けている。同師範科を1930年（昭和5）に卒業した林は、東北学院中等部で英語を非常勤講師として教えた後、翌1931年にアリストテレスの質量論の研究を志して東北帝国大学法文学部哲学科に入学した。大学在学中、林は石原謙教授から古代中世哲学を学ぶとともに、高橋里美教授の土曜会と阿部次郎教授の木曜会にも出席していた。1934年（昭和9）に大学卒業と同時に東北帝国大学法文学部の副手に就き、翌年には同助手となり、同じ年に林瑞栄（東北帝国大学法文学部国文学科卒）と結婚して林家を継ぐことになった。この間、『文化』（岩波書店）に「プラトンの『場所』

上・下」(1934年及び35年)と題する最初の学術論文を発表している。

その後、林は1941年(昭和16)に宮城県女子専門学校の専任講師となるが、その僅か9ヶ月後には、奉安殿への敬礼を怠った生徒を一方向的に退学処分とした学校側に抗議する形で辞職している。これ以後、林はいくつかの教育機関の非常勤講師を務めたことを除けば、経済的苦境に加え戦況が悪化する状況にあつて、ひたすら学問研究に専念した。特に、この間に行われたテイラー著『ソクラテス』(1932年)の翻訳作業は、本文の約半分にも及ぶ分量の訳者補説を加えるほどの徹底ぶりであり、この翻訳書は2度の戦災焼失を乗り越えて、終戦の翌年刊行(桜井書店)されている。

(2) 終戦から東北大学教育学部教授時代へ(1945～65年)

林竹二が終戦直後に行った復員軍人・軍学徒の再教育のための講習会は特筆すべき活動である。終戦後仙台に設置された東北復員監部からの依頼で、林竹二は復員軍人・軍学徒の再教育のための講習会実現のために奔走し、講師選定からプログラムの作成まで担当した(山川丙三郎が英語を担当し、阿部次郎も特別講義を引き受けた)。1945年(昭和20)12月8日から開催された講習会で、林竹二は開講の辞を述べているが、そこでは、大学で学問をするということは「疑問を疑問のままにながれ間持ちつづける力を養うことから始められなくてはならない。」と述べていた⁶⁾。

その後、林竹二は東北帝国大学工学部講師を経て、1949年(昭和24)には新制の東北大学第一教養部助教授、1952年(昭和27)には東北大学教育学部助教授(教育史講座)、そして翌53年には同教授へと、大学人としての経路を歩み始めた。この間、林竹二は、1952年の「ソクラテス及びプラトンに於ける人間形成の問題」(『文化』第16巻第5号)、1953年の「知識による救い—ソクラテス・プラトンに於ける人間教育の問題—」(『文化』第17巻第2号)といった論考を発表するとともに、1950年代後半の時期からは、森有礼、田中正造そして新井奥邃の研究にも着手している。この1950年代からの林の学問研究が一つの結実を見るのは1962年(昭和37)のことであった。すなわち、この年には、年来の古代ギリシア哲学研究の集大成とも言うべき論文「ソクラテスにおける人間形成の問題」(『東北大学教育学部研究年報』第10集)が発表されたのに続き、「抵抗の根—田中正研究への序章」(『思想の科学』9月号)と「近代教育思想と森有礼」(『中央公論』9月号)も発表されている。

林は1963年3月に、森有礼を含む幕末の海外留学生や新井奥邃の足跡の現地調査のために渡米し、特にコロンビア大学では貴重な新資料を多数発見し、さらにヨーロッパ諸国へと研究旅行を続け(パリでは森有礼の孫の森有正と面会)、同年9月に帰国した。折しも東北大学からの教員養成課程の分離問題が表面化し、この大きな混乱の中で林竹二の言動は次第に耳目を集めていくことになる。

東北大学教育学部は、旧帝国大学に師範学校を統合した全国でも唯一の学部として発足

したが、実態的には東北帝国大学法文学部教育学講座の後継である教育科学科（約 20 名の教官）に、宮城師範学校の後継である学校教育学科（教員養成課程、約 60 名の教官）が完全に従属する組織体制となっており、両者の溝を埋める努力は必ずしも効を奏していなかった。宮城県教育委員会および旧師範学校卒業者による国立学芸学部の独立設置を求める陳情運動が展開され、また国の教育政策の点では 1958 年の中央教育審議会答申「教員養成制度の改善方策」以降、教員養成の目的大学化の方向性が鮮明に打ち出されていた。当事者である教育学部では、学問研究と教員養成の調和は不可能とすることから教員養成課程の分離を主張する教育科学科（片平部会）と、あくまでその存続を主張する学校教育学科（教育教養部＝川内部会）が鋭く対峙して、学部としての合意形成を図ることができなかった。このような学内外の状況下の 1964 年 12 月、東北大学評議会は、約 700 人もの学生が取り囲み、警察官により警備された学外施設（ホテル）において、ついに教員養成課程の分離を決定した。

この一連の東北大学の教員養成課程の分離・宮教大設置の騒動の中で、林竹二は、教育科学科の教官としてはほぼ唯一、教員養成課程の分離に反対の立場を貫き通した教官となった（一時は教育学部教授の辞表を提出した）。しかも、林は、混乱の責任を取る形で辞任した教育学部長の後任の選挙（1965 年 2 月）において、皮肉にも教員養成課程（学校教育学科）の教官の支持により教育学部長に選出されている。1965 年 2 月からの 2 年間の教育学部長としての時期は、文字通り「針の蓆に坐らせられた」（林竹二）7）時期となったが、この間にも森有礼および田中正造に関する論考が幾編も発表されている。

（3）宮教大学長の時期（1969～75 年）

1965 年 4 月、東北大学から教員養成課程を分離・独立させる形で宮教大が発足した。発足したとはいえ、まだ宮教大独自の建物がある訳ではなく、東北大学の富沢キャンパスを仮校舎としての授業開始であり、初代の学長（石津照璽）は東北大学学長の兼任（1965 年 4 月～同年 10 月）、第 2 代学長（東北大学教授の金倉圓照、1965 年 10 月～69 年 6 月）も文部大臣による任命制によるものであった。そして、青葉山の新校舎に移転した後（1968 年 4 月）、宮教大の教授会（教官の大半はかつての東北大学教育学部教員養成課程の教官）がようやく組織され、その教授会の手で林竹二は第 3 代学長に選出された。こうして林竹二は、1969 年 6 月から 75 年 6 月までの 2 期 6 年間（1970 年 3 月までは東北大学教授併任）、全国的にも大学紛争の嵐が吹き荒れる困難な時期に（1969 年の東大入学試験は中止）、宮教大の大学改革の陣頭指揮を執ることになる。

（4）授業巡礼へ（1975～85 年）

林竹二は、1975 年（昭和 50 年）6 月、宮教大の学長職を退いた。69 歳の時である。年齢的には安逸な余生を送ることが普通であろうが、1985 年（昭和 60）に 79 歳で亡くなる

までの林竹二の最後の 10 年間は、文字通り老骨にむち打ちながらの過酷な「授業巡礼」に捧げられることとなった。学長職を退任した翌年の 1976 年（昭和 51）には、林のライフワークの一つとも言うべき田中正造研究が、『田中正造の生涯』（講談社現代新書）として結実している（毎日出版文化賞受賞）。しかし、林のもう一つのライフワークであった森有礼と新井奥邃の研究は、ついに完成を見ることはなかった。その最大の要因は、合計で 300 回を超した全国各地への「授業巡礼」に忙殺されたことにあり、しかもその過程で、林竹二自身は自らの授業（教育）観を深化させる作業を最後まで止めなかったことにあった。

林が大学以外のいわゆる学校現場において「授業」を行ったのは、1970 年（昭和 45）10 月、宮教大附属小学校の 6 年生への「開国」の授業が最初であった。林が学校現場で授業を行うことになった背景には、同年 6 月から約 40 日間の入院期間中に、斎藤喜博の著作を「貪るように読んだ」8) ことが契機となり、「いっぺん、授業というものをしてみたかった」9) という理由が挙げられるが、同時により本質的には宮教大の学長として教員養成教育に従事する責任の自覚がったことも重要であろう 10)。いずれにしても、一旦、「授業」を通して学校現場に直接関わることを開始した林竹二には、「子供が素晴らしい力をもっている」にもかかわらず、「その力は、学校教育の中でほとんど引き出されないで、つぶされてしまっている」という「子供の不幸」を座視できなくなり、「授業を根本から考えなおす」ことを教師に訴えるための「授業巡礼」を続けることとなった 11)。その「授業巡礼」の過程で、林竹二は神戸の湊川高校という「学校教育の捨て子たち」12) が集う定時制高校に深く入り込んでいるが、それを林自身は「70 歳になって湊川に入って、生涯の自分の学問を問い直す機会を与えられて」13) いると捉え、そこでの自らの立場を「実習生」14) として位置づけるほど徹底したものであった。

2. 林竹二の学問観

林竹二は、宮教大の学長退任後の 1979 年の講演で、自らの学問の在り方について、以下のように語っている。

「学ぶということは、絶えず自分をつくり変えていくことだ、とわたしは思っています。少し仰々しい言い方をすれば、不断に自己を再形成すること、何度でも出直して自分というものをつきり直す、世界を見直す営み、それが学問だと思うのです。そういう学問についての考え方を、わたしはソクラテス、プラトン、それから田中正造というような人に学んだわけです。わたしは随分良い先生にめぐり合っているのですが、結局本当の師はもの凄く怖いもので、文字通りの厳師であった。その一人がソクラテスであり、田中正造であるわけです。」15)

以下、ソクラテス・プラトン・田中正造等から学び取った林竹二の学問観について、3つ

の相互に関連した側面に分節化しつつ明らかにしていきたい。

(1) 「己の為の学」としての学問

終戦から間もない時期に発表された論考「学問について 一季節外れの考察一」16)は、学術論文ではないものの、林竹二の学問観が端的に表明されたものとして重要である。林竹二は、この論考で、学問とは、本来的には「人の為の学」、つまり他人から良く思われようと飾りたてるために学ぶことではなく、「己の為の学」、つまり自分自身を磨くために学ぶことであり、この「己の為の学」こそが「真実の学」＝「実学」なのだと言主張する。ここで「人の為の学」と「己の為の学」という言葉は、直接的には、林自身も引用しているように、『論語』の一節（憲問篇）、「子曰、古之学者为己、今之学者为人」（子曰わく、古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす）に基づいている。確かに、林竹二は論語にも造詣が深かったことは事実であるが、「己の為の学」を本来の学問（実学）と捉える学問観は、「私のいちばん深い、決定的な影響をのこして、現に私の内部に生きている」17)と林竹二が語っているソクラテスとその弟子プラトンの哲学との格闘の中で獲得されたものであった。

林竹二によれば、「己の為の学」とは、「人間が人間であろうとする、或は自己であろうとするものの追求としての『学』」であり、これこそが「愛智（哲学）で厳密には唯一の『学』であることを、少なくともソクラテス乃至プラトンは信じつづけていた」という。これに対して、「人の為の学」の典型はソフィストのそれであり、そこでは「学とは、世人に伍して有力なるを得しめる一つの術以上ではない」ものであって、その意味で、ソフィストは「学識の小売人、或いは卸売商人以上ではあり得ない」。「己の為の学」は、「よく生きることを可能にする力としての徳」の獲得を目的とするのに対して、「人の為の学」は、「人間の単なる生存を可能にするものとしての技術」の獲得を目的とするものである。

だが、「己の為の学」が「如何なる歴史上の時期に於いても常に困難であった」ことは事実であり、「人の為の学」が流行することは「必然」でもあった。にもかかわらず、林竹二は、それが如何に「季節外れ」で「甚だしいアナクロニズム」であるかも自覚した上で、敢えて「己の為の学」としての学問の在り方を「信じる」立場に固執した。それは林竹二が、「人間とは、与えられて有るのではなく成就せらるべき何ものか」であり、ソクラテスやプラトンに従って、「学を、それを通して我々が初めて『人となる』底の大事と考えていた」からである。しかし、この「己の為の学」を「信じる」ことは、ソクラテスが刑死を選び取る生き方をしたと同様に、絶えざる「自己の再形成」という厳しい生き方を「決意」することを意味していた。「己の為の学」がいつの時代にも困難であるのは、まさにそれがこうした「人間的決意の問題」だからなのである。次にこの側面を見てみよう。

(2) 「仮借のない吟味」と「自己の再形成」

林竹二は、ソクラテス哲学の核心を次のように理解していた。

「ソクラテスは、魂が人間の『自己』であると解した。それ故、魂ができるだけ善くなることによつてのみ人間はその本来性において救われると信じたのであるが、人は自己が何であるかを知らないから、救われうるためにまず自己に関する無知から抜け出る必要がある。いうところの自己に関する無知とは、自己に属する『物』（身体や財産や名聞等々）を自己そのものと思ひ込むことにほかならない。自己そのものを明らかに把握して、どのような場合にも自己に属する『物』を自己と思ひ誤らぬようにすること、そして前者を後者よりも大事にするようなことのないように心がけことが、ソクラテスの教えの核心をなしていた。」¹⁸⁾

林竹二の捉えたソクラテス哲学においては、人間が真の幸福を得る（救われる）ために不可欠のものである「自己が何であるか」を知ること、つまり「善の知識」を獲得する手段とされたものが、「反駁」（吟味、問答）であった。この「反駁とは自他の思うところ語るところを仮借のない吟味にかけて、ドクサすなわち自己欺瞞から、あるいは世間一般の通念への囚われから、ひとを自由ならしめる作業」¹⁹⁾であり、物事を根本から徹底的に追及する営みであった。しかも、この反駁という徹底した吟味によってドクサから解放されることは、最大のドクサが「世間の通念」であるとすれば、人生の価値に関して、世間一般とは異なる考え方や対し方を持つこと、つまり「十字架を負って生きること」²⁰⁾をも意味していた。「己の為の学」を生きる者に、「人間的決意」や「覚悟」が求められるのはこのためである。

「己の為の学」としての学問は、「仮借のない吟味」を通して、本当に自分が求めているものが何であるかを知ること、本来の「自己」を取り戻す営みである。ここで重要なことは、ソクラテス（林竹二）において、「或るものを美しいと知るとは、それを美しいと見る人間が形成される」²¹⁾ことを意味し、知識を得ることは「自己の再形成」²²⁾、つまり「知に従って行為する能力」²³⁾を持つ新たな人間の形成を意味していたことである。この「仮借のない吟味」（「己の為の学」）を通じた「自己の再形成」について、林竹二は田中正造の学びの在り方に関連して、次のように述べている。

「私はかつて、田中正造のような人においては、一つの事を学ぶということは、その事において自分が新たに造られることだと書いたことがある（『田中正造』201頁）。学ぶということは、田中正造の師友新井奥邃の理解にしたがえば、自己を新にすること、すなわち、旧情旧我を誠実に自己の内に滅ぼしつくす事業であった。その事がなしとげられないあいだ正造においては『理解』は成立しなかつたのである。」²⁴⁾

(3) 現実に取り組む「責任の意識」に立脚した教育の場としての大学

1 および 2 で確認されたような独自の学問観に基づいて、林竹二はまた大学の在り方の

独自の考え方を自らのものとしていった。

林竹二が「大学の原型」25)として重視していたのは、プラトンのアカデミイであった。林竹二の理解によれば、プラトンは、「学問を知識の獲得としてではなく、ドクサからの解放、浄化としてとらえる学問観」26)と、そのドクサからの解放が反駁（吟味、問答）という「共同の追求」としてなされるという学問観 27)を、ともにソクラテスから継承した。そのプラトンが創設した「哲学の学校」であるアカデミイは、指導する者と指導を受ける者による「共同生活と共同研究がおこなわれる場」28)であり、そこでの教育は数学及び数学的諸科学を中核とした厳しい科学的・哲学的訓練が行われる場であった。

このプラトンのアカデミイに関して、林竹二が「アカデミイの精神」として特に注意を喚起していたことがある。それは、学問のために「聖別された場所」であるアカデミイにおいては、「日常的利害や関心や立場から自由になって、どこまでも真理が真理のために尊重され、追求されなければならない」29)ということと、その「もっとも厳正な学問的訓練」が、実は学者ではなく立法者等の現実社会の指導者の教育という極めて実践的な目的のためになされていたという事実である。そして林竹二は、こうした「アカデミイの精神」の根底に、「深い次元で現実に取り組む責任の意識」30)があったことを強調している。このことを林竹二は次のように指摘している。

「すぐに役に立つ技術や知識というものを与えるのではなく、現実にたいする人間の深い責任にこたえるために自己の再形成が要求され、その自己再形成の手段として学問が役立つという信念が、プラトンのアカデミイの根底をなしていたのだと、私はそのように考えております。」31)

林竹二は、この「アカデミイの精神」は、「今なお大学にとって死活的な重要性をもちつづけていると私は考えます」32)と述べているように、こうした「現実に取り組む責任の意識」を根底に持つプラトンのアカデミイ、さらにその基盤を成していたソクラテスの「己の為の学」という学問観を、自らの思想とも信念ともしていたのである 33)。

3. 宮教大の教員養成教育改革の理念

林竹二は、学長1期目の任期終了を間近に控えた1972年（昭和47）2月に、1969年（昭和44）以来の宮教大の大学改革について触れ、「我々は、やっと少しずつ教育の内容なり実質なりに手をつけるところまで来た」にすぎず、「我々が今やっていることは改革などというものではありません。非常にささやかな改善の努力、そのささやかな試みです。」34)と述べている。この林学長が謙遜気味に述べた「非常にささやかな改善の努力」とは如何なるもので、とりわけにそれらの改革を貫く理念・基本原理は何であったのか、次に確認してみよう。

(1) 封鎖学生との対話

林竹二は、学長就任2週間後の1969年7月と9月の2度、一部学生集団により大学施設が封鎖・占拠されるという深刻な事態に直面している。実は、この事態への対処の在り方が、その後の宮教大の大学改革の方向性を定めるものとなったと考えられる。林竹二はこの事態に、封鎖された建物の中に乗り込み、長時間にわたって学生たちと「対話」を行っている。その後、2度の封鎖とも、学生自身の手で自主的に封鎖が無条件解除され、他の大学とは異なり機動隊の導入なしに紛争が解決されている。

林竹二が「警察の力」を借りることをしなかった背景には、東北大学からの教員養成課程の「切り捨て」がまさに警察の力を借りてまで断行された経緯を、林竹二自身つぶさに目の当たりにし、そこから「大学と大学人についていろいろなことを学んだ」ことが据えられていた。この経験から、林学長は「どんなことがあっても、大学内に起きた問題を、警察の力を借りて解決するようなことはすまいという肚をかためていた」35)、という。そうした決意を抱いていた林学長が選択した道は、『『封鎖』そのものを教育の場にとり入れること』、つまり封鎖した学生たちとの徹底した対話を通して、「大学全体として負うべき学生の教育にたいする責任をはたすために、大学がどうあるべきか、何をなすべきかを根本から捉えなおすこと」36)であった。その際に、林学長は、封鎖した学生たちを「暴力学生」として排除の対象と見るのではなく、むしろ「封鎖という行為に託して何かを語りかけている学生」37)と見る立場から、根気よく対話を継続していった。

言うまでもなく、対話(吟味)によって問題を根底(根本)から追求するという方法は、林竹二がソクラテス・プラトン哲学から学び取った学問の方法に他ならず、しかもその対話(吟味)は相手ばかりでなく自分自身にも向けられるべきものである38)、と林竹二が再三指摘してきたことを実演するかのようになり、この封鎖学生との対話は「大学とその教育の現実を問うこと」39)に向けられていくことになる。その結果、学生を封鎖へと駆り立てた「根本の動機」が、宮教大の教育とそれを行っている教官への「告発」であること、つまり東北大学からの教員養成課程の「切り捨て」に強硬に反対した教官たちが宮教大に移って現実に行っていることが、「一々がかつての主張を裏切ることばかり」であり、「教官たちのこの背信への告発」であることが理解されてきた40)、という。2回目の封鎖の最中に出された「学長声明」(10月14日付)41)の中で、「教授会の責任は重大である。私は出来るだけのことはする」という林学長の言葉は、学生からの「告発」を真摯に受けとめ、宮教大とそこでの教育活動の在り方を根底から捉え直していこうとする断固たる決意表明であった。

(2) 全学集会と学長・学生部長のリコール制の導入

第1次の封鎖を受けて、7月15日の教授会において「大学改革委員会」の設置、8月1日には同じく「広報委員会」(委員の1人として林学長も加わる)の設置が決定され、

大学改革が徐々に開始されていった。この広報委員会による「広報」第一号（9月27日付）42）は、実は林学長自身が執筆したものであったが43）、一連の大学紛争の中で大学として「きびしい反省と決意をせまられ」る中で、当面する大学改革の基本方針を示したものであった。その中で次の3点は特に重要である。

第1に、この「広報」は、「学生・職員相互あるいは教授会との間の『対話』が生まれる機縁」を意図して発行されていること、つまり「対話」が大学改革の前提として明記されていることである。第2に、「まず着手したい改善措置」として、「大学内では単に被教育者として見られたことから、ともすれば無権利状態におかれた学生の地位についての再検討」が挙げられていたことである。その際に、学生を「大学の重要な構成員として固有の権利と自由をもつと同時に、その反面、学生としての責任をになっているという立場」と見る原則が示され、その原則に沿って「学生規程」その他の諸規則を「徹底的に改訂する」ことが確認された。そして、第3に、第2の立場を踏まえて、「全面的に現行の教育課程等を検討、改革していく」との方針が示されたことである。

この「広報」第1号で表明された3つの基本方針のうち、第1と第2の基本方針を具体化した措置が、全学集会と学長・学生部長のリコール制の導入であった（1970年12月9日の教授会で正式決定）。12月18日発行の「広報」第11号44）は、制度化された全学集会と学長・学生部長のリコール制の趣旨を説明したものであるが、この文章も林竹二学長自ら起草したものであった45）。そこでは、「基本的に教育と研究を任務とする組織」である大学においては、「教官と学生は、教育と研究という共通の課題をともに担うものとして、その相違と対立にも拘わらず根本において同質性をもっている」こと、その意味で全学集会は「交渉の場」ではなくむしろ「根本的な問題の問い直しが成される場」、つまり「討論の場」であること、そしてリコール制の根底には、学長及び学生部長の職責と権限が「学問の研究・教育の場としての大学」においては、「教職員や学生の絶えざる批判のもとに行使されなければならない」、という考え方があることが確認されていた。そこには、指導する者と指導を受ける者による「共同生活と共同研究がおこなわれる場」としてのプラトンのアカデミイの理念が反映されていた、と言えるだろう。

（3）教育（教員養成）への「責任」の自覚と教員養成教育改革

宮教大の大学改革の核心は、以上のような大学運営上の改革と同時並行的に行われた、教員養成教育の在り方の改革にあった。この宮教大における教員養成教育改革のための基本方針を最初に打ち出した文書が、「広報」第3号（1969年10月11日付）に掲載された「今後の授業計画などについて」46）である。この文書で、何よりも注目すべきことは、今後の解決を要する課題の中で、「授業は最も重要なもののひとつ」と位置づけ、授業つまり学生教育の在り方を改革することが「学生に対して、教官が実際に責任を負う道」であると述べて、大学改革の基本理念として、大学とその教員が学生の教育に「責任を負う」

という自覚ないし姿勢が明示されたことである。

この「責任」という言葉が林竹二の学問観の鍵的概念であったことは、上述した通りである。事実、林竹二は学長としても、大学が学生への教育（ここでは教員養成教育）に「責任」を負うとの自覚を基本理念とする大学改革の方向性を繰り返し主張していた。そのことを資料的に確認できる最も早い文書が、1970年（昭和45）6月、教育大学学長会議に林竹二が提出した「小学校教員養成のための教育における二、三の問題点と改善の方向について（学長私見）」47) である。この文書で林学長は、「義務教育学校の教員養成にたいして責任をもつ大学（学部）」の「根幹」を成すはずの小学校教員養成課程が、「陽のあたらない部分」ないし「伴食的な位置」に置かれている「現実」があり、この事態を解消しない限り、教員養成大学（学部）はその「もっとも重大な責任を空しくしているといわざるをえない」と、厳しく現状批判を行っている。その上で、林竹二は、この問題解決の点で「もっとも根本的なもの」として、小学校教員養成教育における「中核」ないし「諸教科を統合する軸」の必要性を挙げ、より具体的には、①教育実践との結合、②教育実践を対象とする科学的研究の教授、この二点を指摘していた。

こうした、学生への教育、特に当時の宮教大で実態的に最も軽視されていた小学校教員養成教育にこそ、「責任」を負うことを自覚することから大学を根本的に改革しようとする林竹二の考え方は、「その後の宮教大の教育改革（教員養成の充実）のなかをずっと貫くものになる」（横須賀薫）48) のである。

1979年の時点で宮教大の改革の現状報告を行った中森孜郎（体育科教育）は、大学紛争以後の宮教大は、教員養成を目的として「つくられた大学から、みずからの意志によってつくる大学への一步をふみ出した」49) と述べている。この「つくられた大学」から「つくる大学」への転換は、林竹二が学問研究を通して明らかにし、また学長としても再三に主張してきた大学の理念、端的には教育（教員養成教育）に大学として「責任」を負うとの自覚があつてはじめて起こり得たことなのである。

最後に、林竹二が学長を務めていた時期に行われた教員養成教育改革の主なものを列挙すれば、以下の通りである。

①一般教育ゼミナールの開設

1969年後期の授業から、一般教育（教養教育）に従来の講義形式の授業に加えて、学生と教員との議論を中心とするゼミナール形式の授業が導入された。その趣旨は、従来の「概論的通説的な性格」の授業に対して、「それぞれの学問的研究方法をふまえながら」、しかも「少人数の発表や質疑応答や討論などを含む授業」50) によって、「科学や芸術を自己のものにするための出発点を築く場」51) を創出することにあつた。導入初年度の1969年後期の時点で、「科学の方法論入門」（高橋金三郎）等の30以上のゼミナールが開設された。

②「教授学」の試み

「諸教科統合の軸」となることを志向した新たな授業科目として、1971年度から「教授学」及び

「教授学演習」が開講された（正式な学科目となったには1974年度から）。「教授学」とは、その運営の中心的存在となった横須賀薫によれば⁵²⁾、教育実践を根底に据えることで、「各教科の教育法教育を統合し、教育学教育、個別科学・芸術・技術の教育の相互連関をはかっていく位置づけをもつ」ものであり、端的には「教員養成教育が展開する軸」として機能するものとして構想されていた。関連して、1974年には「授業分析センター」が開設され、その専任教授として斎藤喜博が招聘された。

③「合同研究室」の創設

入学後2年間は研究室所属がなく、教育と指導体制の点で大きな問題を抱えていた小学校教員養成課程の学生のために、1973年度からの学内施設の再配置計画の過程で、学生と教員の共有する空間としての「合同研究室」が設けられた。1973年の開設時に10の合同研究室が誕生している⁵³⁾。

④教育実習の見直し

3年次で2週間の観察・参加実習と4年次で3週間の教壇実習が基本であったものを、1971年度から3年次で3週間の教壇実習（附属校）と4年次で1週間（翌年からは2週間）の応用実習（公立校）に改革された。しかも、実習生の指導を附属校に一任してきた在り方を、「学部の全教官が教育実習の指導にあたるように」することで、「学部主導型」へと大きく転換することも志向された⁵⁴⁾。

おわりに

以上の検討から、結論的にほぼ次のことを確認することができたと思われる。すなわち、林竹二は、学ぶ者に「仮借のない吟味」を通して「自己の再形成」を迫る「己の為の学」こそが「真実の学」であり、大学はそのような意味での「己の為の学」を組織することに「責任」を負うべき教育の場であるとの学問観と信念を有していた。そして、この林竹二の学問観は、大学紛争後の宮教大の大学改革、特に教員養成教育改革を貫徹する理念・基本原理となっていく。大学が一つの組織体として教員養成教育の在り方を改革する際には、教育と学問研究の関係が厳しく問われ、大学全体として如何なる理念に基づいて学生への教育を行うのか、その一貫した「意志」が問われることになる。その点で、1970年代の宮教大においては、ソクラテス・プラトン哲学から林竹二が学び取った学問観の存在が、同じく大学紛争を経験した他の大学とは異なる独自の教員養成教育改革を推進させ、大学としての一貫した「意志」を持つ続けさせることを可能にしていたのである。

なお、未完には終わったものの、林竹二学長自身大きく関与していた大学院構想につい

ては、本報告では論及することができなかった。今後の教職大学院の設置とも関係して興味深いこの論点の検討は、1970年代の宮教大の教員養成教育改革の教育効果の検証も含めて、今後の課題としたい。

註

- 1) 報告者は既に、弘前大学教育学部が新たな学問領域として提唱している「教員養成学」（教員養成学部における教育と研究の総体を不断に検証することを通して、その教員養成活動の質的改善に資することを目的とする学問）の理論的研究の一環として、宮教大の教員養成教育改革に注目した論考を発表している。本報告は、この「教員養成学」研究と補完的關係にある。拙稿「教員養成学部の基礎理論としての『教員養成学』の創出—教員養成教育論の展開から見たその意義と課題—」『弘前大学教育学部紀要 教員養成学特集号』（2004年3月）、拙稿「『教員養成学』の可能性と課題—『学』としての独自性の視点からの一試論—」『弘前大学教育学部紀要』第94号（2005年10月）。
- 2) 宮教大の改革に関する総括的な新聞記事として、朝日新聞宮城版連載記事「宮教大の素顔 大学改革10年」（1979年11月2日から同11月21日）、河北新報宮城版連載記事「開学30周年 宮教大の挑戦」（1995年9月5日から同10月6日）、等がある。宮教大の改革および林竹二の言動に関する回想的・概説的文献として、国土社編集部編『林竹二 その思索と行動』（国土社、1985年）、『思想の科学』1985年11月臨時増刊号（林竹二研究のために）、小林洋文『人間を学ぶ 林竹二先生の人と思想』（径書房、1990年）、日向康『林竹二 天の仕事』（社会思想社、1992年）、大泉浩一『教育の冒険 林竹二と宮城教育大学の1970年代』（本の森、2003年）、中森孜郎「宮城教育大学における教師養成教育の試み」中森孜郎編著『講座日本の学力16巻 教師』（日本標準、1979年）、向井浩子「戦後教員養成論の再検討（上）」、『東京大学教育学部紀要』第15巻（1975年）、等がある。より踏み込んだ研究として、日本教育学会・大学教育研究委員会『宮城教育大学の大学改革』（1974年）、横須賀薫『教師養成教育の探求』（評論社、1976年）、千葉昌弘「教育学研究と教員養成教育における統合と分離をめぐる問題—東北大学教育学部と宮城教育大学を事例として—」『日本教師教育学会年報』第9号（2000年）、山田秀「生命への畏敬と教育の根源—林竹二博士の人と教育哲学—」南山大学社会倫理研究所編『社会と倫理』第6号（1999年）、等がある。
- 3) 横須賀薫「学長としての林竹二」、『思想の科学』1985年11月臨時増刊号、72頁。
- 4) 岩浅農也「大学を真に改革する力」、『思想の科学』1985年11月臨時増刊号、63頁。
- 5) ここでの林竹二の生涯の概観に当たっては、特に断らない限り主として次の文献を参照した。前掲、日向康『林竹二 天の仕事』、小林洋文『人間を学ぶ 林竹二先生の人と思想』、『思想の科学』1985年11月臨時増刊号、山田秀「生命への畏敬と教育の根源—林竹二博士の人と教育哲学—」

- 6) 前掲、日向康『林竹二 天の仕事』、49 頁。日向によれば、講習会参加者のほぼ全員が翌年には東北帝国大学に進学した。その後も林竹二は希望者に自宅で読書会（如月会と命名された）を開いている。プラトンや論語等を素材としたこの読書会は 1953 年頃まで継続された。
- 7) 林竹二『教育亡国』（筑摩書房、1983 年）、75 頁。
- 8) 林竹二『授業・人間について』（国土社、1990 年。初版は 1973 年）、179 頁。
- 9) 同上、369 頁。
- 10) 同上、223 頁。
- 11) 林竹二『教育の再生をもとめて 湊川でおこったこと』（筑摩書房、1977 年）、i～ii 頁。林竹二自身、全国各地での授業実践を「巡礼」という言葉で表現していた。「ほんとうにいま考えても、よくあれほど根気よくつづけられたとわれながら呆れるほど、根気よく学校現場を廻って歩きました。一種の巡礼です。」林竹二『問い続けて 一教育とは何だろう一』（径書房、1981 年）、92 頁。
- 12) 同上、vi 頁。
- 13) 同上、30 頁。
- 14) 同上、189 頁。
- 15) 林竹二「学ぶということ」（1979 年）、『林竹二著作集 10 生きること学ぶこと』（筑摩書房、1987 年）、142-143 頁。
- 16) 林竹二『学ぶということ』（国土社、1990 年。初版は 1978 年）、2-17 頁。なお、林竹二の下で宮教大の改革を担った一人の小野四平も、林竹二のこの論考に注目して、林の学問的特質を説明している。小野四平「林竹二における学問 —『自分の手に神を携えている者』たちとのたたかい—」、前掲、国土社編集部編『林竹二 その思索と行動』、34-48 頁、林竹二『学ぶということ』巻末に付された小野四平による解説文。日向によると、この論考は、如月会時代の門下生が、青山書院に勤めて、『科学圏』の編集担当になったことを機会に、林竹二が執筆したものという。前掲、日向『林竹二 天の仕事』、258-259 頁。
- 17) 林竹二『若く美しくなったソクラテス』（田畑書店、1983 年）、9 頁。
- 18) 林竹二「知識による救い —ソクラテスおよびプラトンにおける人間形成の問題—」（初出は 1953 年）、『林竹二著作集 1 知識による救い』（筑摩書房、1986 年）、167 頁。
- 19) 前掲、林竹二『教育の再生をもとめて 湊川でおこったこと』、49 頁。
- 20) 林竹二「プラトンのアカデミイについて」（1973 年の講演）、前掲、『林竹二著作集 1 知識による 救い』、216 頁。
- 21) 林竹二「アカデミイの精神」（初出は 1962 年）、前掲、『林竹二著作集 1 知識による 救い』、235 頁。
- 22) 前掲、林竹二『教育の再生をもとめて 湊川でおこったこと』、168 頁。

- 23) 前掲、林竹二「プラトンのアカデミイについて」、229 頁。
- 24) 林竹二『田中正造の生涯』（講談社新書、1976 年）、160 頁。
- 25) 前掲、林竹二『学ぶということ』、52 頁。
- 26) 前掲、林竹二「プラトンのアカデミイについて」、225 頁。
- 27) 同上、212 頁。
- 28) 同上。
- 29) 前掲、林竹二「アカデミイの精神」、233 頁。
- 30) 前掲、林竹二「プラトンのアカデミイについて」、225 頁。
- 31) 同上、229 頁。因みに、プラトンのアカデミイに関するほぼ唯一の邦語文献である廣川洋一『プラトンのアカデメイア』（岩波書店、1980 年）では、この学園が立法者の養成という「実践的動機をその基本意図として抱くものであった」ことは指摘されているが、林竹二が最も注目した「現実に取り組む責任の意識」という側面への論及は見られない。
- 32) 前掲、林竹二『学ぶということ』、65 頁。
- 32) 前掲、林竹二「プラトンのアカデミイについて」、229 頁。
- 33) 林竹二は 1977 年の時点で大学の在るべき姿を自らの学問観に立脚して、次のように指摘している。「借りものの学問には、学生を教育する力はない。絶えず学びながら、自らの学問をつくり出しながら、その『学ぶということ』を学生に教える場所が、大学である。研究は大学に不可欠だが、より根本的なのは、教師の教育への意志、あるいは教育にたいする責任の意識である。その欠けたところには、大学はないのである。
・・・大学が大学になるためには、この一つのことだけは避けることはできない。大学で学ぶということは、人間や社会や、世界を、その根底においては自己を、根本から問いなおす作業をはじめることである。語を換えていえば、俗見と俗情から自己を浄めることである。その事の成ることに大学は責任をもたなければならない。」前掲、林竹二『教育の再生をもとめて 湊川でおこったこと』、6-7 頁。
- 34) 前掲、林竹二『学ぶということ』、179 頁。
- 35) 林竹二『教育亡国』（筑摩書房、1983 年）、82-84 頁。
- 36) 同上、84 頁
- 37) 同上、85 頁。
- 38) 林竹二「ソクラテスにおける人間形成の問題」、『林竹二著作集 1 知識による救い』、57 頁。
- 39) 前掲、林竹二『学ぶということ』、iii 頁。
- 40) 同上、vi～vii 頁。
- 41) 同上、36 頁。
- 42) 同上、140-145 頁。

- 43) 同上、271 頁（小野四平の証言）。
 - 44) 同上、156-164 頁。
 - 45) 同上、164 頁（小野四平の証言）。
 - 46) 『宮城教育大学十年史資料集（下）』、1977 年、197-199 頁。
 - 47) 同上、145-146 頁。
 - 48) 前掲、横須賀薫「学長としての林竹二」、72 頁。
 - 49) 前掲、中森孜郎「宮城教育大学における教師養成教育の試み」、308 頁。
 - 50) 「広報」第 4 号（1969.10.25）、前掲、『宮城教育大学十年史資料集（下）』、199 頁。
 - 51) 「広報」第 3 号（1969.10.11）、同上、198 頁。
 - 52) 前掲、横須賀薫『教師養成教育の探求』、173 頁。
 - 53) 1973 年に設置され 1996 年に廃止となった「合同研究室」の取り組みについて、次の文献は貴重な資料となっている。『「学ぶ」を学びなおす ―宮城教育大学合同研究室の軌跡―』（「共同探求通信」第 22 号、2004 年）。
 - 54) 前掲、日本教育学会・大学教育研究委員会『宮城教育大学の大学改革』、57 頁。
- <付記>本稿執筆の過程で、宮城教育大学教授の笠間賢二氏と千葉市立高洲第二中学校教頭に加藤幸宏氏より、宮教大に関する貴重な資料の提供をいただいた。記して謝意を表したい。